むらからまちへ

明治22年は、わが国に憲法が発布された歴史的な年であり、また、町村制の施行で精道村が誕生した記念すべき年でした。ここに芦屋村・津知村・三条村および打出村の４ヵ村が合併して、精道村の成立をみたのです。精道村名は、精道小学校名をとって命名されました。精道村役場はこのとき、芦屋字樋口新田（現在の精道小学校内）に設けられました。

大正12年になって、隣接地（現在の市役所北側）に新築されました。同８年の戸数は1,930戸、昭和７年には6,000戸となり、住宅街へと発展しました。

精道村誕生当時の執務風景

精道小学校内に設置された精道村役場（写真右手の建物）　大正３年ごろ　当時の人口は、5,094人、戸数1,095戸。

新築された精道村役場　当時、日本一の村役場といわれた。

村役場

新庁舎の村役場は、鉄筋コンクリート造３階建で、敷地572坪、建坪56坪９合、総工費約63,000円で、大正12年６月14日に竣工しました。

新築当時の精道村役場内の風景

新築当時の精道村役場内の風景

大正13年ごろの精道村役場遠景　左の忠魂碑のあるところが現在の市庁舎、右端に精道村役場の建物が見える。

消　防

精道村に消防組織ができた最初は明治24年３月の浜芦屋でした。

大正５年には公設となり、精道村消防組の組織が、大正10年までに打出・茶屋芦屋など第１部から９部まで９組がそろいました。

昭和14年、戦時体制により精道村警防団として新発足し、本団のほか11分団、団員約720人となりました。また、常備消防班も設けられました。

旧芦屋村手押しポンプ(在芦屋神社)

山芦屋消防組(第５部)

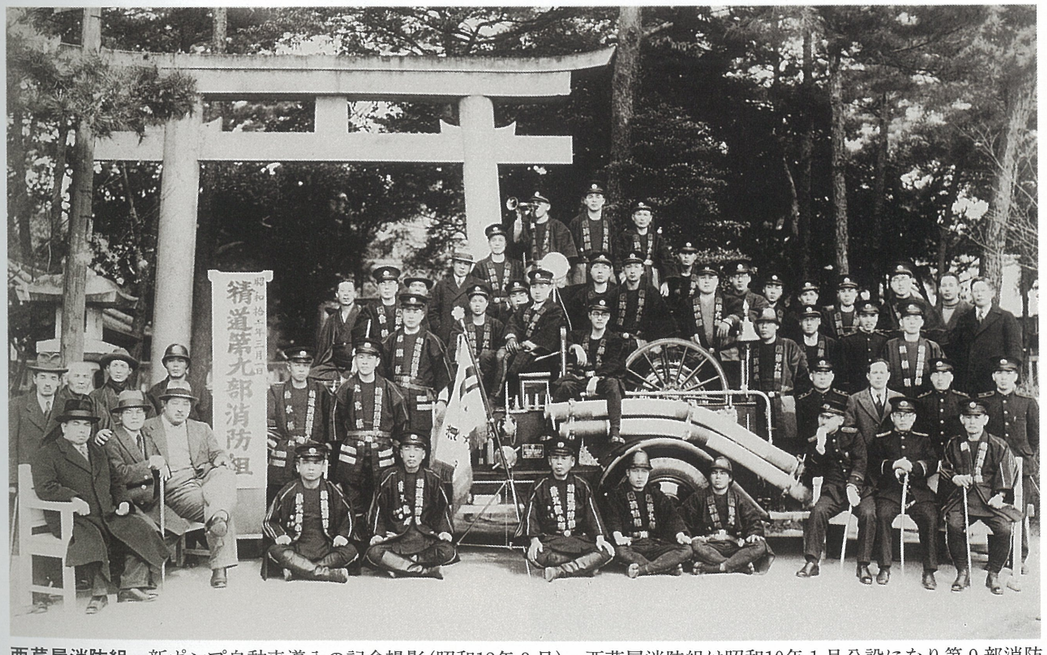
山芦屋消防組　大正７年に設けられた。

三条消防組　出初めのようす　大正末期

三条消防組　三条消防組は大正７年にできた。

精道村常備消防班　昭和14年、それまでの消防組を解消して、警防団がおかれたが、それとは別に常備消防班もおかれ、防空警備、防火に万全の体制がとられた。

山芦屋消防組　昭和14年ごろの消防の組織装備は、自動車ポンプ８台、ガソリンポンプ１台、消防組員360人。



西芦屋消防組　新ポンプ自動車導入の記念撮影(昭和12年３月)。西芦屋消防組は昭和10年１月公設になり第９部消防組となった。

警　察

芦屋警察の沿革は、大正時代までは御影警察署に属する芦屋警部補派出所が設けられていましたが、住宅地として人口の急増により、昭和２年、芦屋警察署が創設されました。

村勢の発展とともに人口も増加し、そのため、村内各地に巡査駐在所が順次増設されました。

芦屋警察署庁舎は、昭和２年８月、村民の寄付によって近代的建築の粋を誇る鉄筋コンクリート３階建が竣工しました。

当時の定員は署長以下38人でしたが、市制施行の昭和15年には、署長以下65人になりました。

芦屋警察署玄関の御影石に彫刻されたみみずく

芦屋警察署　昭和２年８月、竣工落成した本館。

平田駐在所　大正８年

浜打出駐在所　大正15年

前田派出所　昭和２年

六麓荘駐在所　昭和５年

芦屋駅前派出所　昭和13年（22年11月宮川派出所と改称）

山芦屋駐在所　昭和14年

郵便と電話

最初の芦屋郵便局は、大正元年８月に設けられ、窓口事務のみを取り扱いました。以来、各種郵便物の取扱いが増加し、大正８年になって一般行政官庁としての機能をもつようになりました。

市制施行当時の昭和15年には、郵便物の取扱い数量が1,200万件に達するほどになりました。

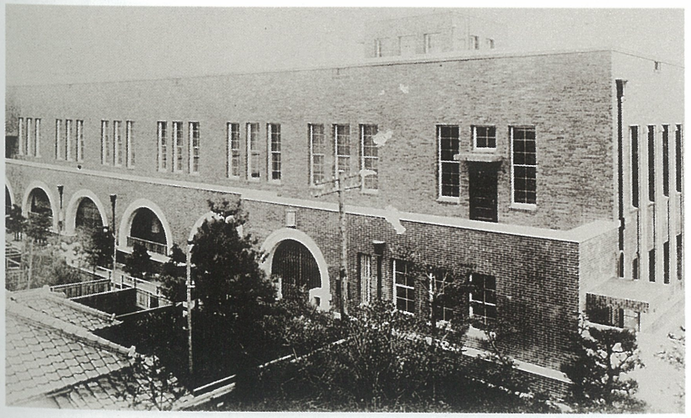
電話は、芦屋郵便局で大正３年11月から開始、当時の加入者数は32件でしたが、昭和２年には1,047件に達し、新たに電話事務室を新築、自動交換方式を採用しました。同８年には、3.3世帯に１台の普及度を示しました。

開設当時の郵便局　現在の市役所北寄りにあり、西向き、敷地20坪・建坪11坪余、外観は洋風平屋建。

大正３年９月建築の新局舎　この年電信電話の取扱いを開始。左手前は阪神芦屋駅(写真は大正末ごろのようす)。

昭和初期の芦屋郵便局

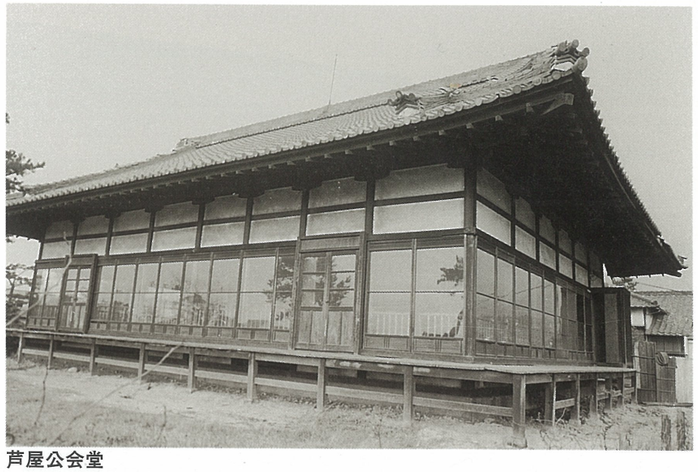
建造中の上芦屋郵便局　昭和２年３月、大正時代に開局した東芦屋郵便局が移転し、上芦屋郵便局と改称して開局した。



芦屋郵便局電話事務室全景　昭和初期、昭和２年電話の加入者数も1,047件に増加し、交換業務も自動式にきりかえることになり、同４年電話事務室が大桝町に新設された。

文化施設

精道村時代は、村勢の発展によって、村民の文化的、社会的な活動も盛んとなり、公会堂施設や遊園地も設けられるようになりました。



芦屋公会堂

芦屋公会堂　村立の芦屋公会堂は、建築材料の寄付を受けて大正８年に建設された。規模は木造平屋瓦葺、建坪45坪。全体の景観は、入母屋造りで御殿風の優雅なものであった。昭和38年、芦屋市民会館建設に伴ってとり除かれた。

打出公会堂　昭和８年には、打出字馬場に木造瓦葺２階建、建坪60坪の打出公会堂も新設され、地区民の各種活動の場として利用された。

寿劇場　大正10年、大桝町に赤レンガづくりのモダンな劇場(収容人員200人)ができ、芝居・映画などを上演してにぎわったが、昭和25年火災で焼失した。

芦屋仏教会館　崇信会を母体として、昭和２年６月、現在の前田町に、鉄筋コンクリート造３階建の仏教会館が落成し、同５年３月に財団法人が設立された。付属事業として同10年、崇信幼稚園を開園。

芦屋遊園風景　大正時代
四季をとおしてみられる白砂青松の自然景観、阪神間第一の健康地芦屋の象徴となる遊園地の設定は、旧国道以南芦屋川堤塘官有地16,085坪に認可を受け、明治40年に開園した。園内施設として、街灯、便所、休息所、ベンチ、遊具などがあり、市域の住宅地形成と相まって名勝地として知られるようになった。

上水道

精道村では、住宅地建設のため保健衛生施設の上・下水道の整備が急がれました。

昭和７年までに山芦屋水道や三条水道、六麓荘水道などの個人または組合組織の簡易水道が建設されました。

村営水道施設としては、昭和13年奥山浄水場が２年10ヵ月の歳月を費やして完成しました。

1841年から約20年の歳月をかけて奥池の開さくに成功した猿丸安時

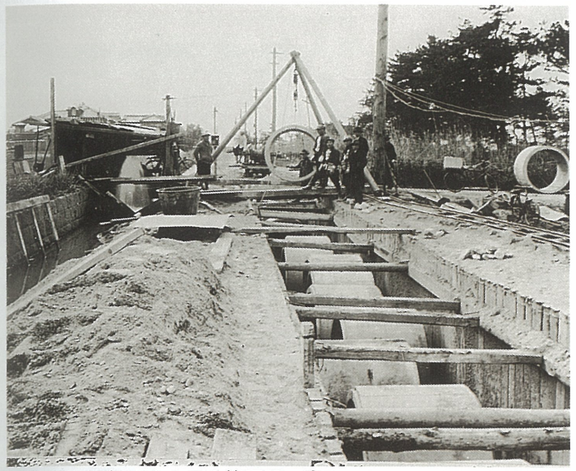
山芦屋水道組合水源池　昭和初期

精道村奥山浄水場全景　給水人口５万人、１人１日平均給水量110リットル、給水区域は標高140メートル以上の高所を除く村内一円とされた。昭和13年７月の阪神大水害で大被害をこうむり、全施設の復旧は、17年11月までかかった。

電気・ガス・下水道

明治41年10月、阪神電鉄が電灯供給を開始しました。点灯数は、明治42年には87灯でしたが、大正５年3,036灯、同８年9,666灯と急激な増加をみせています。ガスは、大正元年８月、神戸ガス株式会社が容積５万立方フィートのタンクを打出に設置し、11月からガスの供給を開始しました。

下水道事業は、昭和９年度から同18年度に至る10ヵ年の長期事業として計画されましたが、戦争や物価の変動などで曲折をたどり、15年11月市制施行により、芦屋市下水道事業として工事がすすめられることになりました。



昭和11、12年ごろの下水管埋設工事

精道村に電灯がついたころ
阪神芦屋駅の夜景。当時は、電車や駅の電灯の夜景がネオンのように美しい印象をあたえ、見物する人が多かった。

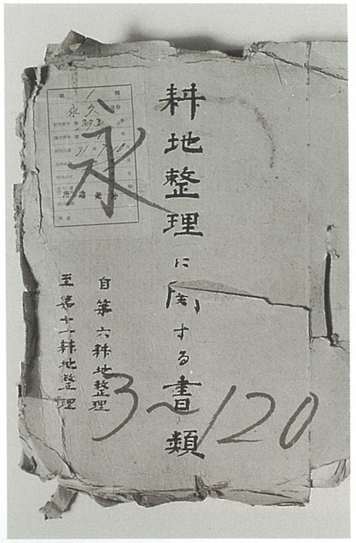
打出にあったガスタンク
大正３年に設置された(写真は昭和35年ごろ)。

芦屋川発電所跡　大正２年、芦屋川上流に阪神水電興業株式会社経営の水力発電所が設けられたが、のちに、阪神電気鉄道株式会社の経営に移った。

住宅地の形成

交通の発達によって、山手の芦屋川をはさんで丘陵地に住宅建設が延び、広壮な住宅街が形成されました。

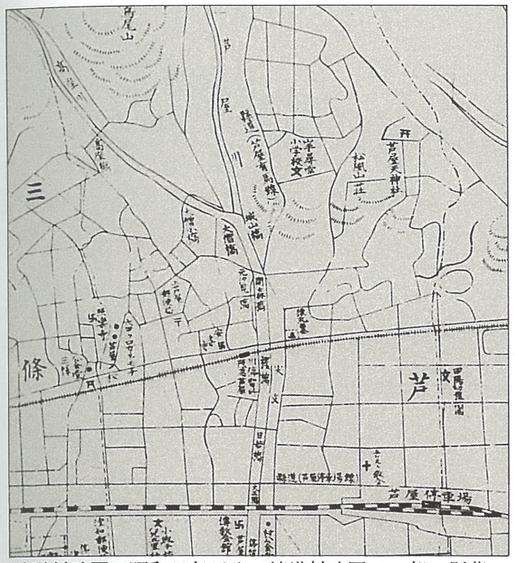
また、12回におよぶ耕地整理を行い、宮川上流の丘陵地へ市街地は発展していきました。



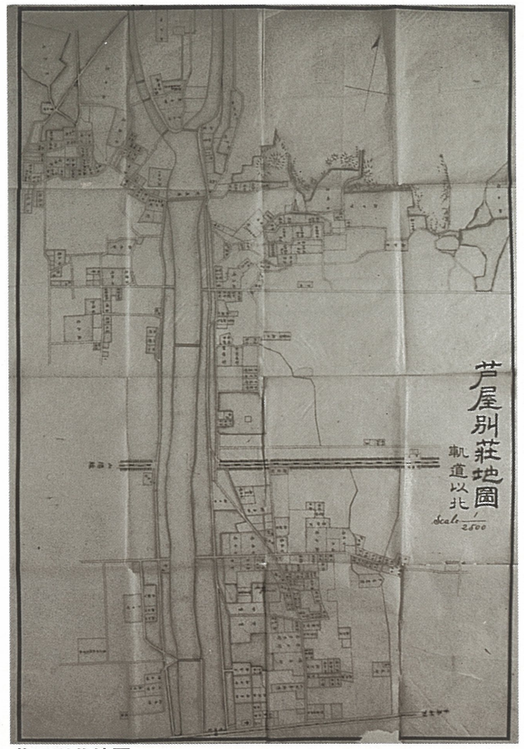
耕地整理に関する書類　著しく細分化されかつ不整形な農地を整理し、農業近代化をはかるため、明治政府は明治32年「耕地整理法」を発布、芦屋でも大正５年から大正年間に13組合が組織され山手地区を除いてほとんどの地区で耕地整理が実施された。

芦屋全景　大正期芦屋名所絵葉書から

旧三条村からみた精道村風景　明治末ごろ



精道村略図　昭和10年ごろの精道村略図の一部。別荘地として最初に開かれた「松風山荘」の文字が見える。



芦屋別荘地図

昭和10年ごろの山手方面の航空写真

六麓荘住宅地の開発

“東洋一の健康地”をキャッチフレーズに、株式会社六麓荘が、昭和４年、国有林の払下げを受け、住宅地建設を始めて、昭和６年竣工しました。

上・下水道、ガスのほか電気線、電話線も地下配線工事による画期的な試みがなされ、交通機関としては六麓荘乗合自動車が運転されました。

造成中の六麓荘住宅地　昭和初期

水道、ガス、電気地下埋設工事

電話地下配線工事

昭和10年ごろの六麓荘

六麓荘売り出し当時のパンフレット